



# 祝 登別温泉開湯150年特別企画

# 特集 湯のまちの人々

広報のぼりべつでは、4月号から開湯150年を迎えた登別温泉を祝い、150年にわたる歴史や交通の発達と変遷、観光名所、おまつり、観光ボランティアガイド会などを紹介してきました。今月号では、特別企画の最後として、湯のまちに暮らす人々にインタビューを行います。

登別温泉の歴史について

# インタビュー

登別温泉で70年を過ごし、婦人服店『木舎』を経営しながら、来し方行く末を見守っている佐々木一さんの目から見た登別温泉について、話をお伺いします。



佐々木 一さん

## 強い夫婦のきずなから始まった登別温泉物語

開湯150年と言いますが、一口に150年と言えば、家族でも5代、6代以上の変遷があり、なかなか昔をたどれないものです。ちょうど、NHKで放映されている大河ドラマ『篤姫』と同時代ですね。

150年前と言えば、その当時の日本では、『安政の大獄』というとても血なまぐさい事件がありました。しかし一方で、日本の北端では、愛妻の皮膚病を治すために険しい山道を進み、ついに登別の湯の薬効により、皮膚病を治したという強い夫婦愛のドラマが登別温泉の原点になったのです。

『安政の大獄』は幕府を守るために米国との開国を強行した井伊直弼と、尊皇攘夷を唱える水戸藩との『主義、主張の対決』ですが、滝本金蔵の温泉開発は、『愛の実践』です。妻への愛にとどまらず、多くの人の病を治したいという強い気持ちは、その後の登別温泉の繁栄へとつ

ながっていくことになるのです。

登別温泉の底流には、いつも『病気の人が、傷ついた人』を癒してあげたいという『愛の思想』があります。徒歩でしか行けなかった未踏の地も、馬車や鉄道、バスといった交通の利便性の高まりとともに、利用度も次第に増えていきました。特に、日露戦争の時に、傷病兵の治療の場となり、家族も一緒に泊まれる宿泊用の旅館が増えていったことから、温泉街としての発展が始まったようです。その後、大正、昭和の時代には、病気の治療だけでなく、一所懸命働いた農家の人が一年のご褒美として農閑期に湯治をする場所として栄えていくことになりました。旅館が林立し、通りにはお土産さんなどが立ち並び現在の温泉街の原風景が完成したと言えるでしょう。湯煙たなびく情感たっぷりの湯のまち登別の誕生と言ったところでしょうか。

同時に、そうして数を増やした旅館やお店の人たちの中で、このまちを愛するという共同体意識が芽生え、道路や周辺の整備、まち並みや公園

作りの運動を起こそうということになっていきます。昭和6年(1931年)登別温泉観光協会の誕生には30の方が加入しています。



▲大正15年当時の登別温泉街

## 先人たちの果敢な開拓精神

登別温泉が一大観光施設として人々から認知をされ、さらに大きくしていくためには、経営戦略を磨き出さず、みんなで力を合わせてお客さまをどんどん誘致していこうという運動が高まったということですね。